

国士舘大学附属図書館国民読書年企画講演会

「江戸時代の印刷・出版文化－出版業の成り立ちと発展－」

はじめに－印刷文化の伝来と発展

- (1) いつ、どのようにして日本へ伝えられたのか
遅くとも奈良時代までには中国より伝わる
- (2) どのようにして発展していったのか
仏教文化とともに発展、平安期以降は寺院が印刷・出版の舞台となる

1. 古活字版の世界

- (1) 古活字版とは
16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて開花した活字を用いた印刷・出版
商業目的の出版ではないが、後の民間出版の誕生に影響を与える
- (2) 古活字版を花開かせた人々
僧侶（学僧）、皇室、武家（為政者）、宣教師、医師、民間文化人、豪商
- (3) 海外からの活字印刷文化の影響
西洋と朝鮮から伝わった金属活字文化
- (4) 徳川家康による印刷・出版事業
木活字と銅活字による印刷・出版
- (5) さまざまな出版ジャンル
漢籍、宗教書、実用書、古典文学

2. 江戸時代における出版事業の誕生

- (1) 民間出版業の誕生
京都が発祥の地、17 世紀初め頃には誕生したが、寛永年間（1624～1644 年）に増加
- (2) 出版業を誕生させた 4 つの要素
職人集団、書商（本屋）、著作者、読者
- (3) 書籍目録に見る初期出版業
寛文 10（1670）年の目録には約 3,900 点の書籍が、元禄 9（1696）年の目録には倍
の約 7,800 点の書物と、400 名弱の書商が掲載

3. 出版業の舞台の移り変わり

- (1) 京都から大坂へ
- (2) 上方から江戸へ

4. 上方における出版文化の確立（京都・大坂）

(1) 丹緑本

本文を木版または活字で印刷し、挿絵を丹や緑、黄色の絵具で塗った本

(2) 御伽草子

室町期に誕生した手写本・絵巻物を、江戸時代に木版印刷
一寸法師、浦島太郎、鉢かづき姫など

(3) 仮名草子

ひらがなを主体とした、啓蒙・教訓・娯楽的な読み物

(4) 浮世草子と井原西鶴の活躍

当時の社会風俗、男女間の情を写實的に描いたもの
好色物、町人物、武家物があり、特に好色物は上方、江戸で好色本ブームとなる

5. 江戸出版文化の隆盛－戯作の誕生

(1) 戯作とは何か

俗文学で、特に江戸期の小説類を戯作と呼ぶ

(2) 読本と曲亭馬琴

文章を主体としたもので、中国の大衆小説の影響を受ける。
前期読本（上方）と後期読本（江戸）に分けられる。『南総里見八犬伝』が代表作

(3) 洒落本と山東京伝

遊里の情景を写實的に描写したもので、遊女と客との対話を主とする。
『仕掛文庫』、『傾城買四十八手』が代表作

(4) 滑稽本と十返舎一九

滑稽話で読者を笑わせるもの。『東海道中膝栗毛』、『浮世風呂』が代表作

(5) 人情本と為永春水

下町の情緒豊かな江戸町人の恋愛を中心としたもの。『春色梅児誉美』が代表作

(6) 草双紙

江戸で出版された絵入りで装丁が簡単な本
赤本、青本、黒本、黄表紙、合巻

6. 江戸時代の本屋と出版の流れ

(1) 本屋の種類

書本屋、唐本屋、物之本屋、地本問屋、絵草子屋

(2) 出版隆盛を支えた資本屋

寛永期頃に誕生、天保期（1830～1844 年）には江戸だけで 800 軒の貸本屋
江戸以外にも京都、大坂、名古屋などほぼ全国に存在
『南総里見八犬伝』、『春色梅児誉美』などは、貸本屋を通じて読者を獲得

- (3)本ができるまで－『的中地本問屋』に見る出版の流れ
彫り→摺り→丁合→化粧断ち（断裁）→表紙がけ→綴じ
- (4)出版を支えた彫師と摺師の技
- (5)版元の役割
出版、販売、販促活動、プロデュース
蔦屋重三郎の活躍

7. 庶民文化の発展と出版ジャンルの広がり

- (1)教育
往来物など
- (2)啓蒙
百科事典、博物図譜、海外地理書など
- (3)生活・風俗
美容書、婚礼仕様書、歳時記など
- (4)趣味・娯楽
俳諧、相撲、歌舞伎、遊郭、飼育・鑑賞など
- (5)旅
名所図会、旅行情報誌、案内図、風景画など
- (6)飲食
料理本、料理番付など
- (7)その他